

氏名	別 宮 謙 介
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博甲第 4704 号
学位授与の日付	平成25年 3月25日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Could salvage surgery after chemotherapy have clinical impact on cancer survival of patients with metastatic urothelial carcinoma?
(転移性尿路上皮癌に対する全身抗癌化学療法後の救済手術は生存期間に強い影響を与える)

論文審査委員 教授 吉野 正 教授 土井原 博義 准教授 貞森 裕

学位論文内容の要旨

転移性尿路上皮癌に対する全身化学療法後の救済手術療法（転移巣の切除）の有用性についてはいくつかの報告があるが、未だ議論のあるところである。そこで我々は、転移性尿路上皮癌に対するジェムシタビン、シスプラチン、パクリタキセル併用化学療法後の救済外科手術の治療成績について検討を行った。2003年から2010年まで、転移性尿路上皮癌に対し多剤併用化学療法を行い治療効果を認めた31例のうち、PRと判定された27例を対象とした。そのうち12例に救済手術療法が施行されており、男性10例に対し女性2例、年齢の中央値は64歳、転移部位は後腹膜リンパ節10例、肺2例であった。結果、12例全例で転移巣の完全切除が可能であった。経過観察期間の中央値は32.5カ月で、手術を施行した群と施行していない群との間で癌特異的生存率（3年 71.6% vs 12.1%, $p=0.01048$ ）、無増悪生存率（3年 39.8% vs 0.0%, $p=0.01032$ ）とも有意差を認めた。転移部位など患者背景に偏りはあるものの、転移性尿路上皮癌に対する全身化学療法後の救済手術療法は生存率に大きな影響を与えることが証明された。

論文審査結果の要旨

本研究は転移性尿路上皮癌に対するジェムシタビン、シスプラチン、パクリタキセル併用化学療法後の救済外科手術の治療成績について検討したものである。多剤併用療法がなされ、治療効果がみられた31例中PRと判定された27例を研究対象としている。そのうち12例に救済手術療法が施行された。転移部位は後腹膜リンパ節10例、肺2例であった。その結果、12例全例で転移巣の完全切除が可能であった。観察期間中央値 32.5 か月で、手術を施行した群としていない群との間で癌特異的生存率、無増悪生存率ともに前者が良好な結果が得られた。転移部位など患者背景の偏りがあるが、転移性尿路上皮癌に対する全身化学療法後の救済手術療法は有用な手段であることが示唆された。

実験の目的、手法、結果とその解釈とも適切になされており、転移性尿路上皮癌に関する重要な知見を得たものと評価される。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。